The 5th Weekday Afternoon Concert

チャイコフスキーの誘惑
Temptation of Tchaikovsky

指揮とお話 アンドレア・バッティストーニ
Andrea Battistoni, *conduct & talk*

※プロフィールはp.8をご覧ください。

コンサートマスター 三浦章宏
Akihiro Miura, *concertmaster*

チャイコフスキー：イタリア奇想曲 作品45（約15分）
Pyotr Ilyich Tchaikovsky: Capriccio italien, op.45 (ca. 15 min)

— 休憩 Intermission（約15分）—

チャイコフスキー：交響曲第5番 ホ短調 作品64（約50分）
Pyotr Ilyich Tchaikovsky: Symphony No.5 in E minor, op.64 (ca. 50 min)

I. アンダンテ – アレグロ・コン・アニマ
Andante — Allegro con anima

II. アンダンテ・カンタービレ、コン・アルクーナ・リチェンツァ
Andante cantabile, con alcuna licenza

III. ワルツ、アレグロ・モデラート
Valse. Allegro moderato

IV. フィナーレ. アンダンテ・マエストーソ – アレグロ・ヴィヴァーチェ
Finale. Andante maestoso — Allegro vivace

5/17

第5回

平日の午後のコンサート

5/17(水) 14:00開演 東京オペラシティ コンサートホール
Wed. May 17, 2017, 14:00 at Tokyo Opera City Concert Hall

主催：公益財団法人東京フィルハーモニー交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra
Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan

イラスト：ハラダ チエ

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

本公演のポイント

解説◎柴田 克彦

1 ロシア最大の巨匠チャイコフスキー、練達の名作2つ

2 チャイコフスキーのオーケストレーションの手腕がとりわけ際立った2作

3 イタリア＝西欧を映した管弦楽曲と、ロシアより先に西欧で評価された交響曲

4 交響曲第5番は、1つのテーマが全楽章に登場する点が重要なポイント

PLUS 1

国際派チャイコフスキー

チャイコフスキーは、たびたび西欧を訪れています。中でも多く通ったのは、フランス、スイス、イタリアなど。特にイタリアには、1873、74、77、78、79、80、81、82年……と一時期（越年を含めて）毎年のように滞在しました。何しろ彼がマイホームと呼べる家をロシアに持ったのは、45歳になってから。ちなみに1891年には、ドヴォルザークより早くアメリカにも行っています。しかも西欧で、ブラームス、グリーグ、ドヴォルザーク、マーラー、ドリーブ、フォーレ、ラロ、グノー、マスネなどの作曲家と交友していますから、相当な国際派といえるでしょう。思えば、ピアノ協奏曲第1番とヴァイオリン協奏曲は共に、ロシアの大家から曲を否定され、ドイツ系の奏者によってウィーンとボストンで初演されています。これは単なる偶然なのでしょうか？ それに本日演奏される交響曲第5番も、最初に評価されたのはロシアよりも西欧でした。我々が聴くとロシア的に感じるこうした音楽も、地元の人にとってはどこか違和感があった、言い換えれば西欧的な要素が強すぎたといえるのかもしれません。

本日の作曲家

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー

Pyotr Ilyich Tchaikovsky

（1840－1893）

ロシア最大の作曲家。幼少から音楽に熱意を示しながらも、父の意志を汲んで法律学校で学び、一旦は法務省に勤務しました。しかし音楽への情熱さめやらず、官吏を辞めて、後にペテルブルク音楽院となる音楽学校に入学。卒業後はモスクワ音楽院の教師を務めながら作曲を続けました。

卒業翌年の1866年、早くも交響曲第1番を完成。1875年にはピアノ協奏曲第1番、1876年にはバレエ『白鳥の湖』を作曲します。1877年、教え子と電撃結婚したものの、神経を病んで入水自殺を図り、すぐに別居。しかし同年から鉄道王の未亡人フォン・メック夫人より多額の年金を受けて作曲に専念し、2人は手紙だけの奇妙な関係を15年間続けました。ただこの激動期の1878年に、交響曲第4番、ヴァイオリン協奏曲、歌劇『エフゲニー・オネーギン』を相次いで完成しています。

その後しばらくは、西欧やウクライナの妹の家などで多くの時間を過ごしましたが、1888年以降は、交響曲第5番、バレエ『眠りの森の美女』『くるみ割り人形』などの名作を完成。指揮活動でも成功を収めました。ところが交響曲第6番『悲愴』初演の9日後に急死。死因は謎に包まれています。

彼は情緒不安定で神経質だったといわれ、同性愛疑惑でも知られています。しかし西欧的な手法とロシア的な語法を融合させた作風で、グローバルな評価を獲得。甘美な旋律、情熱的なロマンティシズムと相まって、多くの作品が定番レパートリーとなっています。

法律を学んでいた1863年ごろのチャイコフスキー

チャイコフスキーを支援したフォン・メック夫人

楽曲解説

チャイコフスキー：イタリア奇想曲 作品45

リムスキー=コルサコフの『スペイン奇想曲』と共に、ロシアの作曲家が書いた“異国物の管弦楽曲”を代表する作品。ロシア音楽を愛するイタリア人バッティストーニにピッタリの1曲でもあります。

チャイコフスキーは、1875年から78年にかけて、ピアノ協奏曲第1番、バレエ『白鳥の湖』、交響曲第4番、歌劇『エフゲニー・オネーギン』、ヴァイオリン協奏曲など、名曲を立て続けに生み出しました。またこの時期は、ミリューコヴァなる女性との突然の結婚と破局、モスクワ河への入水、メック夫人からの年金の開始、それによるモスクワ音楽院辞職などの重要事が続いた激動期でもありました。『イタリア奇想曲』は、その延長線上に位置する1880年に作曲された作品。この年には『弦楽セレナード』、序曲『1812年』も書かれ、第1充実期ともいうべき名作群を締めくくることになります。

1878年にモスクワ音楽院の教授を辞して自由な時間ができたチャイコフスキーは、各地に旅行するようになり、1879年末には、弟モデストと共にパリやローマを訪れました。本作は、その際に受けた陽光輝くイタリアの印象を、旅行中書き留めたメロディなども用いて描いた、チャイコフスキーには珍しいほど明るく躍動的な音楽。翌年ロシアに戻って完成され、12月モスクワで初演されました。

曲は、色彩感溢れる5つの部分がメドレー風に連なっています。ローマ滞在中のホテルの前庭の騎兵隊兵舎から毎日聞こえていたというファンファーレに始まり、弦楽器による荘重な主題、オーボエで奏されるイタリア民謡「美しい娘」などが登場。テンポを速めて軽快な主題が2つ奏され、クライマックスが築かれます。さらにテンポを上げて南イタリアの民族舞曲タランテラのリズムを交えながら華麗に進行。一旦重厚な場面に変わった後、畳みこむように高揚し、高らかに終結します。全体に管楽器の活躍が際立っており、その妙技も聴きどころです。

チャイコフスキー：交響曲第5番 ホ短調 作品64

チャイコフスキーの三大交響曲（第4～6番）のひとつ。ロシアの全交響曲の中でも屈指の人気を誇っています。

交響曲第4番から10年、指揮活動等で外国に滞在することが多く、創作活動は若干停滞気味だったチャイコフスキーですが、1888年、好環境のフロロフスコエ村に居を構えたのを機に創作意欲が沸き上がり、僅か3か月ほどで本作を完成しました。同年ペテルブルクで初演された際には、批評家から評価を得られなかったものの、翌1889年ハンブルクで大成功。以来、西欧を中心に人気を獲得しました。

チャイコフスキーは、第1楽章冒頭の旋律を「運命、もしくは神の摂理への完全な服従」と表現しました。そのため、本作は「運命」がテーマだと解釈されており、その旋律は「運命動機」と呼ばれています。主な特徴は、運命動機が“固定楽想”として各楽章に登場する点、第3楽章に通常の交響曲とは違ってワルツを用いている点、暗い運命動機が終楽章では長調に姿を変える点など。全体をみれば、深刻さ、甘美さ、情熱、歌、迫力等々、チャイコフスキーの魅力が満載された名曲です。

第1楽章：アンダンテ ― アレグロ・コン・アニマ。最初にクラリネットで奏されるのが「運命動機」。主部は、歩むような第1主題と、のびやかな第2主題を中心に、ダイナミックな展開を遂げます。

第2楽章：アンダンテ・カンタービレ、コン・アルクーナ・リチェンツァ（=多少の自由さをもつ）。ホルンのソロで出される主題を中心とした甘美で陶酔的な緩徐楽章。やや速めの中間部が挟まれます。

第3楽章：ワルツ、アレグロ・モデラート。作曲者十八番の艶美なワルツに、小刻みな動きの中間部が対比されます。

第4楽章：フィナーレ、アンダンテ・マエストーソ ― アレグロ・ヴィヴァーチェ。荘重な序奏から速い主部へ移り、荒々しく刻まれる第１主題と、木管で出される第２主題を中心に激しく進行。全休止の後、凱旋行進曲のような終結を迎えます。

しばた・かつひこ（音楽ライター）／音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。コンサートのプログラム、宣伝媒体、CD、雑誌等の原稿執筆およびプログラム等の編集業務のほか、「ラ・フォル・ジュルネ」での講演や一般の講座も行うなど、クラシック音楽を中心に幅広く活動中。